

武蔵国分寺跡発掘調査概報

31

— 市立第四中学校建設に伴う第6次調査 —

2006年3月

国分寺市遺跡調査会

序

国分寺市立第四中学校は、武蔵国分僧寺の西南、同尼寺の東方に位置している。同中学校の敷地には、昭和48年の第1次発掘以来、昭和61年度の第5次発掘にかけて、鍛冶遺構を含む掘立柱の建物跡などが検出され、それらが計画性をもって配置されていたことが明らかにされてきた。現在「修理院」かと考えられている遺構群は、市立第四中学校の敷地を中心として周囲一帯にわたっていると想定されている。

「修理院」の規模など不分明であるが、それは、市立第四中学校のグラウンド部分が“遺構保存区域”として、校舎増築・プール・フェンスなどが“事前調査区域”として関係機関により協議されてきた結果であり、必ずしも敷地全域の様相が発掘によって明らかにされることなく現在にいたっている。

平成17年、市立第四中学校の本校舎とプールの間を増築工事が行われることになり、当該地域が“事前調査区域”に含まれているため、発掘調査が実施された。その結果、第8次調査で小穴として認識されていた遺構が、掘立柱建物1棟として確認することができた。

この度の発掘調査の結果は、従前より推考されてきた「修理院」のあり方に一つの資料を追加したものであり、今後における当該地域のさらなる性格究明に一石を投じたものであると言えよう。

調査にあたり全面的な協力を得た国分寺市教育委員会の関係者各位に対して感謝の意を表する次第である。

平成18年3月

国分寺市遺跡調査会

会長 坂 詰 秀 一

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において、昭和48年以来実施されている調査の内、市立第四中学校々地における第590次調査の成果をまとめたものである。
発掘調査は国分寺市教育委員会より委託を受けて実施した。
2. 報告書作成は、国分寺市遺跡調査会 武蔵事務所で行った。
3. 本書の執筆・編集は、坂詰秀一の監修のもとに、調査員全員の検討、討議を経て上敷領 久・上村昌男が行った。
4. 発掘調査ならびに整理作業に参加協力いただいた方々は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

発掘作業

藤崎 努・共和開発株式会社

整理作業

山口啓子・大羽正子・中村雄紀

凡 例

共通

1. 遺構は遺跡をとおしてほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。

縄文時代の遺構については末尾に J を付けた。

また、本文中においては「SI92住居」「SK3268土坑」「PJ小穴」のように記述した。

S B 柱穴・掘立柱建物 S I 住居 S K 土坑 P 小穴

S D 溝 S K J 土坑(縄文) P J 小穴(縄文)

2. 遺物は各調査において種別毎に連続番号を付し、下記の遺物記号を冠して表示する。

縄文時代

土器類

J E 中期前半

石器類

A F 楔形石器

歴史時代

土器類

P H 土師器

P K 須恵器

P L 土師質土器

P N 灰釉陶器

瓦・埴類

K B 宇瓦

K C 男瓦

K D 女瓦

金属製品類

M Y 鉄滓

3. 遺物の記述については全て一覧表とした。

(1) 表は調査回数、遺構、種別毎にまとめてあり、原則として遺物番号順に列記してある。

(2) 表中の計測値の内、括弧のないものは完数值、() は残存数值、(()) は復元数值、— は計測不可を表す。また、単位は特に表記のないものは全てcmである。

(3) 遺物の分類については「武蔵国分寺跡発掘調査概報XIV」に拠った。

図面・図版

1. 遺構

(1) 遺構配置図表示(グリッド)の数字は発掘基準線中心からの距離を表す。発掘基準中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は前者の南北基準線上中心点南26.276mに後者がある。

また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7° 7' 01"、磁北から0° 37' 01" それぞれ西偏する。

(2) 断面図表示の数字は水系レベルで海拔高を示す。

(3) 遺構のスクリーン・トーン・の指示は以下のとおりである。



III b 層



III c 層



IV・V 層

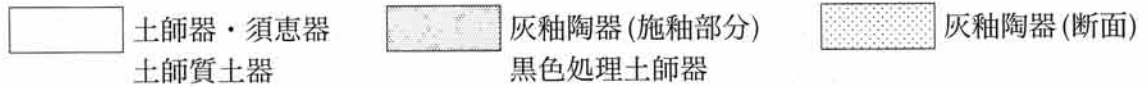
(4) 図面の縮尺は次のとおりに統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図 1/200・1/800

掘立柱建物 1/20・1/80 土坑 1/30

2. 遺物

(1) 遺物のスクリーン tone の指示は以下のとおりである。



(2) 遺物図面中の数字は、図面番号・遺構名・遺物番号・図版番号の順とした。

(3) 遺物図版中の数字は、図面番号・遺構名・遺物番号の順とした。

(4) 遺物の縮尺は次のとおりに統一したが、一部異なるものがある。

[図面]

縄文時代	土器類(破片)	1/3	石器類	1/1
歴史時代	土器類	1/3	金属製品類	1/2
	瓦・埴類	1/4		

[図版]

縄文時代	土器類(破片)	1/1	石器類	1/1
歴史時代	土器類	1/1・1/3		
	瓦・埴類	1/1・1/4		
	金属製品類	1/1		

目 次

序	1
例 言	2
凡 例	3
I 調査に至る経過	7
II 調査地区の概観	11
1. 調査地区の位置・立地	11
2. 調査地区の歴史的環境	11
3. 層 序	12
III 調査経過	13
IV 検出遺構と出土遺物	15
V 小 結	19
VI 総 括	20
参考文献	21
国分寺市遺跡調査会組織	22
報告書抄録	23

挿 図 目 次

- 第1図 遺跡の位置
- 第2図 調査地位置図
- 第3図 標準土層図

表 目 次

- 第1表 第590次調査 調査工程表
- 第2表 出土遺物一覧表（1）
- 第3表 出土遺物一覧表（2）

図 面 目 次

- 図面1 市立第四中学校々地遺構配置図（1/800）
- 図面2 第590次調査 歴史時代遺構配置図（1/200）
- 図面3 第590次調査 縄文時代遺構配置図（1/200）

- 図面 4 第590次調査 S B 226掘立柱建物実測図
図面 5 第590次調査 S B 226掘立柱建物・S K 3268・3269土坑実測図
図面 6 第590次調査 S K 3268土坑・P J -19小穴・遺構外出土遺物

図版目次

- 図版 1 第590次調査 歴史時代調査区
1. 調査区 発掘着手時状況（南から）
2. 調査区 掘削作業風景（西から）
- 図版 2 第590次調査 歴史時代調査区
1. 表土掘削作業風景（西から）
2. 南区 発掘作業風景（北西から）
- 図版 3 第590次調査 歴史時代調査区
1. 北区 歴史時代検出遺構全景（南から）
2. 南区 歴史時代検出遺構全景（西から）
- 図版 4 第590次調査 S B 226掘立柱建物
1. S B 226掘立柱建物全景（北から）
2. S B 226掘立柱建物全景（西から）
- 図版 5 第590次調査 S K 3268・3269土坑
1. S K 3268・3269土坑全景（西から）
2. S K 3268土坑・P J -1小穴全景（東から）
3. S K 3268土坑・P J -1小穴土層断面（東から）
- 図版 6 第590次調査 縄文時代調査区
1. 北区 縄文時代検出遺構全景（北から）
2. 北区拡張部 縄文時代検出遺構全景（南から）
- 図版 7 第590次調査 S K 3268土坑・遺構外出土遺物
- 図版 8 第590次調査 P J -19小穴・遺構外出土遺物

I 調査に至る経過

国分寺市より、市立第四中学校々舎増築工事の通知が平成17年2月24日付国教ふ収第551号にて市教育委員会に提出された。増築工事は工事面積316.31㎡であり、本校舎とプールの間建設される計画であった。

所在地は国分寺市西元町三丁目10番7号にあり、武蔵国分僧・尼寺中間地点に位置する。市立第四中学校内における埋蔵文化財の発掘調査歴は以下のとおりであり、武蔵国分寺に係わる住居跡・掘立柱建物跡等の重要な遺構群が検出された。なお括弧内の調査次数は市立第四中学校内における調査であり、今次調査は第6次調査となる。

武蔵国分寺跡第1次調査（第1次調査）… 昭和48年3月6日～同年9月9日

武蔵国分寺跡第8次調査（第2次調査）… 昭和49年12月19日～昭和50年9月17日

武蔵国分寺跡第17次調査（第3次調査）… 昭和51年5月21日～同年12月17日

武蔵国分寺跡第38次調査（第4次調査）… 昭和52年4月4日～同年11月24日

武蔵国分寺跡第267次調査（第5次調査）… 昭和61年10月2日～昭和62年1月31日

市立第四中学校周辺地域は、後述するように武蔵国分僧・尼寺中間地域にあり、古くから重要な地点であることが指摘されてきた。そのため、昭和48年に市立第四中学校の建設計画が明らかにされた際には遺跡の保存問題が大きく取り上げられたが、市学校施設建設を優先した。校舎建設に伴う上記調査の成果から当該地が、重要遺構が数多く存在することが明らかになった。そのため、校地検出遺構は盛土保存を原則としてきたが、プール建設等、予定される校舎増築部分など、盛土保存が困難な施設もあり、これらについての現実的な対応を考慮して、施設整備と埋蔵文化財の取り扱い区分の設定については以下のように協議されてきた。

①遺構保存区域…グラウンド部分

グラウンド部分は、今後とも施設が置かれることがないので面的な遺構保存区域とする。

②事前調査区域…校舎増築部分・プール部分・外溝施設（フェンス等）部分など。

当区域は、調査後の施設建設に際して可能な限り設計変更等により遺構の保存を図るものとする。

この内、計画地となったのは②事前調査区域で、武蔵国分寺跡第1次調査地と第8次調査地の間に当たり、過去に埋蔵文化財の発掘調査が行われていない地域であった。そのため、本工事を主管する国分寺市教育委員会教育部庶務課施設係と協議の上、校舎建設工事により遺構が影響を受ける部分についての発掘調査を実施することとした。

発掘調査は国分寺市遺跡調査会が担当し、国分寺市と下記の内容で委託契約を締結すること

1 調査に至る経過

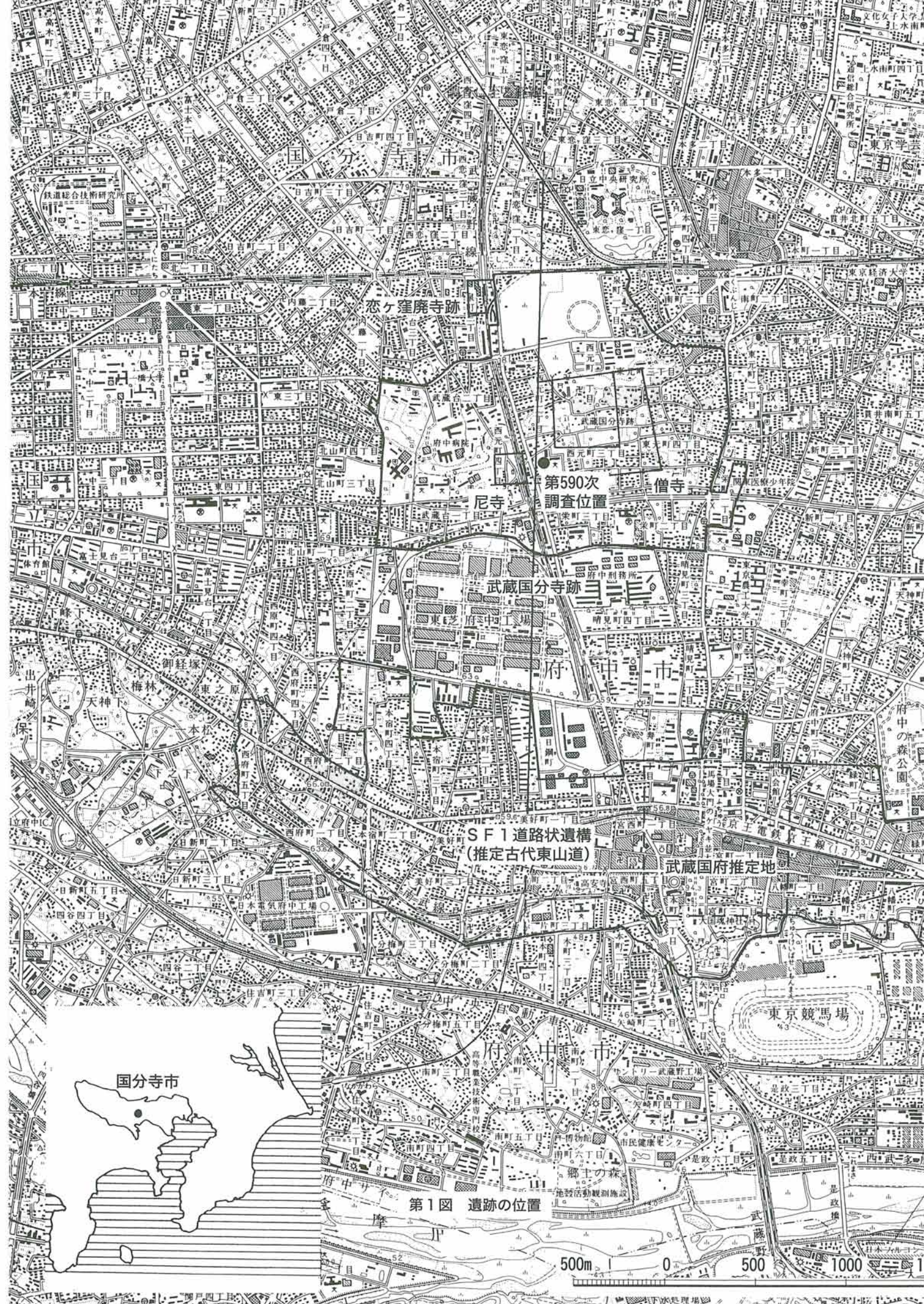
によって実施することとした。

調査の対象は、工事の掘削深度が設計地表面下2mに及ぶことから、武蔵国分寺跡に関連する歴史時代面（奈良・平安時代）から、縄文時代面までを対象とする。さらに、調査区の設定には、第8次調査地で検出された建物遺構との関連が明らかにされるよう重複させて設定するものとした。その結果、調査対象面積は250㎡に設定された。

委託契約期間は平成17年4月1日から平成18年3月31日までとし、現場における発掘調査は6月末までとすることとした。

さらに、調査中は①作業においては、十分安全を確保すること。②学校への立ち入りについては、事務室へ報告して確認を得ること。③作業に当たり、十分学校及び担当者と調整の上施工に当たること。④児童及び第三者の安全には十分配慮することとし、現地調査は、平成17年4月22日より着手した。

委託経費の概算額は8,062,950円とした。



恋ヶ窪廃寺跡

尼寺

第590次調査位置

武蔵国分寺跡

府中市

SF1道路状遺構
(推定古代東山道)

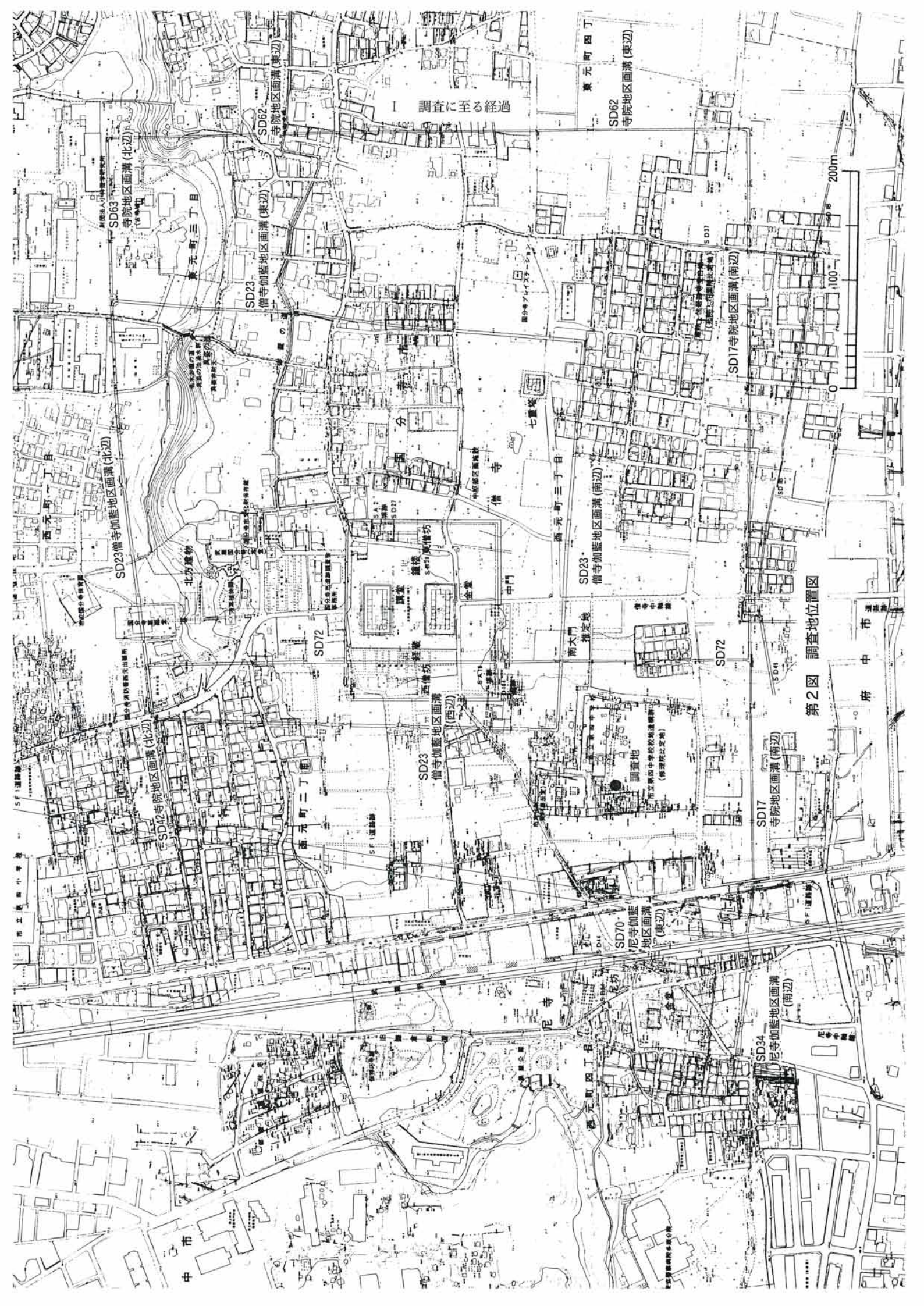
武蔵国府推定地

東京競馬場

国分寺市

第1図 遺跡の位置

500m 0 500 1000



調査に至る経過

第2図 調査地位置図

府中市

200m

100m

SD63 寺院地区画溝(北辺)
 SD62 寺院地区画溝(東辺)
 SD23 僧伽藍地区画溝(東辺)
 SD23 僧伽藍地区画溝(南辺)
 SD17 寺院地区画溝(南辺)
 SD72
 SD42 寺院地区画溝(北辺)
 SD23 僧伽藍地区画溝(西辺)
 SD70 尼寺伽藍地区画溝(東辺)
 SD34 尼寺伽藍地区画溝(南辺)

西元町三丁目
 西元町二丁目
 西元町四丁目

北方屋敷
 西元町
 西元町
 西元町

調査地
 調査地
 調査地

中門
 中門
 中門

西元町三丁目
 西元町三丁目
 西元町三丁目

SD62 寺院地区画溝(東辺)
 SD17 寺院地区画溝(南辺)
 SD72
 SD70 尼寺伽藍地区画溝(東辺)
 SD34 尼寺伽藍地区画溝(南辺)

府中市

II 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地

武蔵国分寺跡は、国分寺市西元町1～4丁目を中心とする付近一帯に所在している。僧寺北方部には、国分寺崖線と称される比高差約12mの崖が東西方向に形成されており、この崖線の上面が武蔵野段丘面であり、下面が立川段丘面である。崖線際からは現在でも豊かな湧水が湧き出しており、野川の源流域の一つである。この湧水を背景として、武蔵野段丘面上には旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く分布する。中でも国指定重要文化財の勝坂式土器を出土した多喜窪遺跡は縄文時代中期の著名な集落遺跡である。

武蔵国分寺跡は北辺の武蔵野段丘面を東西の区画溝で区画し、湧水点を取り込むように区画している。主要伽藍は立川段丘面に配置されており遺跡が二段丘面にまたがって立地する地理的特徴がある。さらに、武蔵国分寺跡の全体像は寺院関連遺構群と周辺に展開する住居群から成り立っている。この住居群の広がり、僧寺金堂を中心にして、府中市域に所在する推定武蔵国分寺参道口遺跡を南限とすると、概ね東西1.5km、南北1kmに及んでおり、この範囲を「寺地」と仮称する。また他の国分寺には類例がない三重の区画があり、僧・尼寺各々の区画を伽藍地、僧・尼寺を含む外側の区画を寺院地と仮称している。僧・尼寺は、その間を東山道武蔵道が南北に通過しており、西側に尼寺が、東側に僧寺が配置されている。

2. 調査地区の歴史的環境

今回調査を実施した市立第四中学校々地は、東山道武蔵道東側の僧寺々院地の南西隅に当たり、僧・尼寺中間地点に位置する。当該地及び周辺地区は武蔵国分寺跡の中でも特に竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構が集中して検出されてきた地域である。市立第四中学校々地は昭和48年度の第1次調査以来、校舎等の増築に伴う5回の調査が行われた。その結果竪穴住居跡89軒、掘立柱建物跡40棟等が整然と配置されていることが確認された。これらの遺構群は建物などの建て替えや重複が多く見られ、長期間にわたってこの地域が利用されたことを示している。さらに第1・8次調査において鍛冶工房と考えられる遺構が検出され、この地域は寺の営繕関係の施設である「修理院」と推定された。また第8次調査では住居の床面直上から「緑釉花文皿」が出土して注目された。市立第四中学校々地の南西側で社員寮建設工事に伴う発掘調査では焼失住居から「唐草四獣文銅蓋」と称される銅合金製の蓋が出土した。この蓋の表面には連珠文、四葉文、唐草文、獣形等の動物文が施され、中央との密接な関係を示す資料である。

II 調査地区の概観

3. 層 序

I a層 盛土。ロームや砂利などが混じる。層厚は40cm程度。

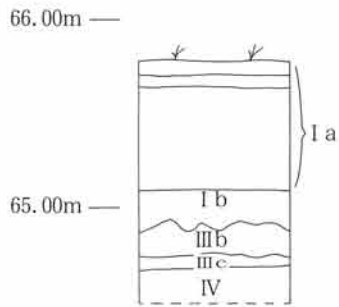
I b層 表土。いわゆる耕作土。乾燥しやすく崩れやすい。

層厚は20cm程度。

III b層 暗茶褐色土。下部ほど褐色が強くなる。縄文時代の遺物を多く包含する。

III c層 茶褐色土。ローム漸移層。上部ほど縄文時代の遺物を多く包含する。

IV層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。



第3図 標準土層図

Ⅲ 調 査 経 過

今次調査は、第1次調査地と第8次調査地の間であることから、特に第8次調査地と重複するように調査区を設定した。そのため、今次調査については、第8次調査地で検出された遺構の再確認と今次調査地で検出される遺構の関連を明らかにすることが調査の重要な目的であった。

調査は平成17年4月25日から表土掘削を開始した。今次調査地は盛土が著しく、また歴史時代遺構の包含層であるⅡ層は削平されていたせいであろうか、表土掘削の結果、遺構の確認面はⅢb層であり、地表面からの深さは約90cmであった。

Ⅲb層で確認された第8次調査の遺構はSB23・24掘立柱建物、SI92住居、SK109・111及びSD1・21溝である。歴史時代で新たに検出された主たる遺構はSB226掘立柱建物、SK3268・3269土坑及び小穴群である。この段階で、第8次調査でSB24掘立柱建物の柱穴3-4・3-5・3-6の東側にそれぞれ並行するように検出されていた3基の小穴については、掘立柱建物跡の柱穴であるという認識がなかったが、SB226掘立柱建物の柱穴1-2・1-3・1-4であることが明らかにされた。

これらの歴史時代遺構調査は平成17年5月20日に終了し、縄文時代遺構の調査に移行され、遺構は小穴61基を検出した。

以上の調査及び埋め戻しの終了は平成17年6月14日である。この結果最終的には215.2㎡の面積を調査した。調査終了までの調査進行状況は第1表のとおりである。

現場調査終了後、国分寺市遺跡調査会武蔵事務所にて報告書作成のための整理作業に着手し、平成18年2月15日をもって整理作業を終了した。

今次調査における現場調査の実働日数は36日、遺跡調査会発掘作業員の延べ人数は36人。さらに整理作業の実働日数は79日、遺跡調査会整理作業員の延べ人数は154人である。本調査の精算額は、7,605,223円である。

IV 検出遺構と出土遺物

今次調査において、歴史時代 掘立柱建物1棟、土坑2基、小穴8基。縄文時代小穴61基を検出した。その中で歴史時代 掘立柱建物1棟、土坑2基について記述する。

また出土した遺物は 須恵器片171点・土師器片50点、土師質土器片32点、灰釉陶器片9点、緑釉陶器片1点、男・女・鏡瓦片等196点、鉄滓2点、縄文土器片18点、石器1点が出土した。観察可能な資料については第2～3表に詳細を記した。なお、縄文時代については小穴群以外の遺構は検出されなかったが、五領ヶ台Ⅱ式土器片が1基の小穴と遺構外包含層から少量出土していることから周辺に当該期の遺構が存在することを予測させる。

S B226掘立柱建物（図面2、4、5・図版4）

僧寺中軸線南172.94～182.64m、西152.50～158.32mの範囲で確認した。主軸は桁行でN-1°-Wの南北棟である。当該建物跡は第8次（昭和50年度調査）調査において柱穴1-2・1-3・1-4が検出されていたが、当時は建物柱穴としては認識されていなかった。今次調査において柱穴2-1・2-2・2-3・2-4・3-1・3-2・3-3・3-4が検出されたことによって、これらを柱穴とする建物の規模は東西2間（4.68m）、南北3間（9m）の南北棟の掘立柱建物であることが明らかにされた。ただし柱穴1-1は今次調査においても確認されなかった。検出状態での柱間は桁行平均3.1m、梁行平均2.4mで桁行・梁行共にややばらつきがある。以下個々の柱穴の遺存状態を長径、短径、深さの順に記す。

1-2（34cm、32cm、25cm）1-3（32cm、30cm、24cm）、1-4（71cm、52cm、30cm）、2-1（31cm、24cm、60cm）、2-2（31cm、28cm、15cm）、2-3（32cm、28cm、27cm）、2-4（78cm、46cm、28cm）、3-1（64cm、44cm、68cm）、3-2（74cm、60cm、10cm）、3-3（38cm、24cm、35cm）、3-4（86cm、78cm、29cm）である。平面形は総じて円形ないし不整楕円形を呈し、断面形はU字形を呈する。覆土は黒色土とローム粒子、ロームブロックを含み、締まりのある暗黒褐色土が主体であるが、柱穴底面の「あたり」と称する硬質部分はいずれの柱穴からも検出されなかった。

柱穴内からの遺物は柱穴2-1より須恵器の体部小片が1点出土している。

S K3268土坑（図面2、5・図版5）

僧寺中軸線南188.74～189.92m、西156.14～157.27mの範囲で確認した。規模は長径1.2m、短径1.14mを測り、主軸はN-33°-Eで平面形はほぼ円形を呈する。深さは22cmを測り、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土と、やや暗い黒褐色土の2層であり、ローム粒子、スコリアを

含む。

遺物は土師器・須恵器の坏片・甕片、及び男・女瓦片等が総計70点出土した。いずれも小破片であり時期を確定できる資料は無い。また鉄滓が1点出土した。

当該遺構の機能については、遺構の規模に対して、小破片と言えども70点の破片が出土していることから、あるいは廃棄施設的な機能を持つ遺構であることも推測されよう。

S K3269土坑（図面2、5・図版5）

僧寺中軸線南185.56～186.82m、西155.20～156.44mの範囲で確認した。規模は長径1.26m、短径1.24mを測り、主軸はN - 90° - Eで平面形は隅丸方形を呈する。深さは32cmを測り、断面は箱形を呈する。覆土は暗褐色土1層であり、ローム粒子、茶褐色土粒子・ブロックを含む。

遺物は出土していない。

第2表 出土遺物一覧表(1)

S K 3268 土坑 土器 一 覧										
図 面 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 底 高 径	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考				
6-1 図版7 P K 01	須A-環	覆 土	— (2.8) —	口縁部わずかに外反する。	内外面ともにロクロ成形。	小破片。還元焰焼成。灰褐色。緻密。				
6-2 図版7 P L 01	土質-環	覆 土	— (2.4) —	口縁部外反する。	内外面ともにロクロ成形。	小破片。酸化焰焼成。明橙色。赤色スコリア粒子を含む。				
6-3 図版7 P N 01	灰釉-塊	覆 土	— (2.0) —	口縁部強く外反する。	内外面ともにロクロ成形。施釉はハケ塗り。	小破片。還元焰焼成。灰色。緻密で硬質。				
S K 3268 土坑 男 瓦 一 覧										
図 面 版 遺物番号	出 土 位 置	狭 端 広 全 端 長	厚 さ	成・整形の特徴					備 考	
				凹 面			凸 面			端 面
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		特 徴
6-4 図版7 K C 01	覆 土	— (5.9)	1.55	粘土紐	《27×30》	側端縁 へら削り。	—	側端縁 へら削り。	小破片。明灰色。海綿骨針を含む。	
S K 3268 土坑 女 瓦 一 覧										
図 面 版 遺物番号	出 土 位 置	狭 端 広 全 端 長	厚 さ	成・整形の特徴					備 考	
				凹 面			凸 面			端 面
				素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		特 徴
6-5 図版7 K D 01	覆 土	— (6.9) (5.0)	2.1	粘土紐	《24×21》	—	網目L 《9》本	—	棒状圧痕あり。	小破片。灰茶褐色。小砂粒を含む。
S K 3268 土坑 金属製品 一 覧										
図 面 版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法			備 考				
6-6 図版7 M Y 01	鉄 滓	覆 土	最大径 最大厚 重さ(g)	4.05 1.65 35.7	表面あばた状である。					
遺構外 土器 一 覧										
図 面 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 底 高 径	器形の特徴	成・整形の特徴	備 考				
6-7 図版7 P H 01	土師-塊	南 区 盛 土	— (3.1) —	体部わずかに内湾する。	内面内黒処理の後、へら磨き。体部外面に輪積み痕あり。	小破片。酸化焰焼成。内面内黒。黒褐色。細かい雲母を含む。				
6-8 図版7 P H 02	土師-環	北 区 拡張部 盛 土	— (3.3) —	体部より垂直に立ち上がる。	体部外面に輪積み痕あり。	小破片。酸化焰焼成。明茶褐色。緻密。				
6-9 図版7 P K 02	須A-環	南 区 掘 乱	— (1.5) 《6.4》	底部より丸味を帯びて体部に至る。	底部ロクロによる回転糸切り。	底部1/2残存。還元焰焼成。灰黒褐色。小砂礫と海綿骨針を含む。				
6-10 図版7 P K 03	須A-環	南 区 掘 乱	— (4.0) —	体部より垂直に開く。	内外面ともにロクロ成形。	小破片。還元焰焼成。灰黒褐色。小砂礫を少量含む。				
6-11 図版7 P K 04	須A-壺	南 区 掘 乱	— (6.4) —	頸部より垂直に開く。	内外面ともにロクロ成形。口縁部に6本の波状沈線文様を施す。	小破片。還元焰焼成。灰黒褐色。小礫を含む。				
6-12 図版7 P K 05	須B-環	北 区 盛 土	— (2.0) 《5.4》	底部より内湾して体部に至る。	内外面ともにロクロ成形。底部ロクロによる回転糸きり。	底部1/3残存。酸化焰焼成。明橙色。緻密。				

第3表 出土遺物一覧表(2)

遺構外 宇瓦一覧														
図面版 遺物番号	出土 位置	上弦弧幅 下弦弧幅 弧深	厚さ	内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
				厚さ	文様	上		下		幅	文様			
						厚さ	文様	厚さ	文様					
6-13 図版8 KB01	南区 盛土	(10.5) (10.0) -	6	-	KK	1.0	d	-	-	3.4	a	0.2	(6.0)	顎の形態B1-c。 1/16残存。技法D。 焼成良好。暗灰色。 小礫を含む。顎凸 面縄目L(9)本。

遺構外 女瓦一覧														
図面版 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長	厚さ	成・整形の特徴						備考				
				凹面			凸面		端面					
				素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴					
6-14 図版8 KD02	北区 覆乱	- (5.1)	1.65	粘土板	《21×18》	-	縄目L (9)本	-	-	-	-	-	-	小破片。明灰褐色。凹面に押印 「子玉」の逆字。
6-15 図版8 KD03	南区 覆乱	- (14.0) (19.2)	2.15	粘土板	27×25	無調整	縄目L 9本	無調整	へら削 り後横 ナデ。	-	-	-	-	1/6残存。暗茶赤褐色。
6-16 図版8 KD04	南区 盛土	- (5.4)	(1.2)	粘土板	《24×24》	-	-	糸切り 痕あり。	-	-	-	-	-	小破片。暗灰褐色。海綿骨針を 含む。

PJ-19 小穴 縄文土器一覧						
図面版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
6-17 図版8 JE03	深鉢	覆土	(4.0) -	胴部片	器面に結節した縄文を施す。	小破片。焼成良好。茶褐色。金 雲母と小砂礫を含む。五領ヶ台II 式。

遺構外 縄文土器一覧						
図面版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
6-18 図版8 JE04	深鉢	北区 III層上面	(4.0) -	胴部片	半截竹管による平行沈線文 を施す。	小破片。焼成良好。明茶褐色。 金雲母を多く含む。五領ヶ台II 式。
6-19 図版8 JE01	深鉢	北区 III層上面	(3.4) -	胴部片	半截竹管により隆帯を施し、 竹管による交互刺突を行う。	小破片。焼成良好。明茶褐色。 金雲母を含む。五領ヶ台II式。
6-20 図版8 JE02	深鉢	北区 III層上面	(4.2) -	胴部片	半截竹管により隆帯を施し、 竹管による刺突を行う。	小破片。焼成良好。茶黒褐色。 金雲母を多く含む。五領ヶ台II 式。

遺構外 石器一覧							
図面版 遺物番号	種別	出土 位置	石材	最大長 最大幅 最大厚	重量 (g)	特徴	備考
6-21 図版8 AF01	楔形石器	北区 拡張部 覆乱	チャート	2.6 1.9 0.5	2.9	剥片両端を折断したものを素材 とし、側縁に微小な二次加工を 施す。	完形。

V 小 結

今次調査における歴史時代遺構の調査で検出された、主たる遺構はSB226掘立柱建物及びSK3268・3269土坑である。特にSB226掘立柱建物については、本文中にも述べたように、第8次調査時点で西側柱穴が確認されていたが、その全容は明らかではなかった。今次調査の結果小規模ながら2間×3間の総柱南北棟であることが明らかにされた。

第8次調査で検出されていたSB24掘立柱建物はほぼ同位置で3回の建て替えを行っている。規模は2間×5間の南北棟であり梁行5.3m、桁行15.3mを測る。柱穴の規模は概ね長径87cm、短径72cmで長方形を呈し、確認面からの深さは67cmを測る。建物の規模、及び柱穴の規模そのものは違うが、SB226掘立柱建物とSB24掘立柱建物の位置関係を検討すると(図面2参照)、両建物の共通点が観察される。先ず両建物の主軸方向は僧寺中軸線に平行でほぼ一致する。また、建物北側の梁行位置は東西方向でほぼ一致し、桁行方向での両建物の柱穴間の距離は約3.1mでほぼ一致し、接近している。SB226掘立柱建物の面積を仮に柱穴の心々で計算すると約42㎡、同様にSB24掘立柱建物は約81㎡であり、SB226掘立柱建物はSB24掘立柱建物のおおよそ1/2の規模に相当する。

SB226掘立柱建物とSB24掘立柱建物の時期関係・新旧関係は、両建物の東側・西側柱穴列の間隔で見ると、軒先の間隔が極めて狭いことから、同時併存は想定しがたい。両建物共に時期が判別される遺物の出土が無いことから遺物から見た新旧関係は不明である。

市立第四中学校々地内の既往の発掘調査の成果から、当該地区は竪穴住居跡や掘立柱建物跡が重複しながらも、整然と計画的に配置され、鍛冶工房の発見等から寺の営繕を担った「修理院」として位置付けられている。今次調査において検出されたSB226掘立柱建物と第8次調査で検出されていたSB24掘立柱建物(ほぼ同位置に同規模で3回の建て替えが行われていた)の関係を見ても、時間差を有しながら建物の配置・方向性や規模に計画性が認められ、当該地の性格を色濃く反映しているものと考察される。

なお、縄文時代(五領ヶ台Ⅱ式期)土器片が僅かではあるが出土した。住居跡等の遺構は検出されなかったが、従来武蔵野段丘面に主体的に広がるとされてきた当該期の遺構が、立川段丘面においても小規模ながら存在する可能性を示唆しており、今後の調査について十分考慮される必要がある。

VI 総 括

武蔵国分二寺の伽藍中枢部と寺院地については、概ね把握される段階に到達しているが、その全容については、それぞれの地によって必ずしも明瞭にされ、かつ全体像が明確に示されていると言うことは出来ない。

古代伽藍の実態を把握するためには、仏・法地、僧地、俗地のあり方の認識が重要であるが、従来、とかく仏・法地中心、僧地従属、俗地等閑視の傾向が支配的であった。

武蔵国分二寺跡の発掘調査による究明に際しては、如上の視点の解明が目標とされてきたことは当然のことであった。とくに、俗地についての実態については、すでに「修理院」推定地の発掘資料が得られており、より一層の資料追加と検討が望まれてきていたのである。

平成17年に実施された国分寺市立第四中学校の校舎増築工事に伴う発掘調査は、工事面積316.31㎡を対象として行われ予期した成果を挙げる事ができた。

当該地域は、僧寺の西南方、尼寺の東方、僧・尼寺の中間部分である。昭和48年の第1次調査以来、“事前調査区域”として設定されていた区域にあたり、昭和49年から50年にかけて実施した第2次調査（武蔵国分寺跡第8次調査）に隣接する。

発掘の結果、2間×3間の総柱構造の掘立柱建物1棟が検出された。当該建物跡の西側に接している2間×5間のSB24掘立柱建物は、武蔵国分寺跡第8次調査時点において3回の建て替えが行われていたことが明らかになっている。位置を変えることなく3回の建て替えが行われたSB24掘立柱建物の南北棟の存在は注目されるであろう。そこには当該建物が南北棟として時間の経過のなかにおいて変わることなく機能していたことを示しており、整然と配されている周囲の建物群とともに、この区域が「修理院」比定地として推考されてきたことを示す一つの資料として理解することが出来るであろう。

この度、検出されたSB226掘立柱建物に対し、時間差をもって存在していたSB24掘立柱建物は、建て替えられながら南北棟として機能していた。それは、SB226掘立柱建物とは性格の異なる建物であったことは明らかである。

今後とも、「修理院」比定地に対する目配りは、武蔵国分二寺の俗地のあり方の究明に不可欠であると言えよう。

(調査団長 坂 誥 秀 一)

参 考 文 献

武蔵国分寺跡関連報告書

- | | | |
|------------|------|---|
| 国分寺市 | 1986 | 『国分寺市史 上巻』 |
| 国分寺市遺跡調査団 | 1988 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XII－昭和50～53年度公共下水道面整備に伴う調査－』国分寺市文化財調査報告第27集 |
| | 1989 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XV－昭和53年度国分寺市公共下水道面整備西元町地区3号工事に伴う調査－』国分寺市文化財調査報告第30集 |
| | 1990 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XVI－国分寺市公共下水道面整備南部地区18号工事に伴う調査－』国分寺市文化財調査報告第31集 |
| | 1994 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XX－国分寺市公共下水道面整備南部地区19号工事に伴う調査－』 |
| | 1996 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XXI－国分寺市公共下水道面整備西元地区5・6号工事に伴う尼寺西・南方地区他の調査－』 |
| | 1998 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報XXII－国分寺市公共下水道面整備南部地区15号工事他に伴う調査－』 |
| 武蔵国分寺遺跡調査団 | 1981 | 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報V－市立第四中学校建設に伴う第1次調査－』国分寺市文化財調査報告第12集 |
| | 1985 | 『武蔵国分寺跡発掘調査概報VIII－北方地区・国際電信電話株式会社国分寺寮建設に伴う調査－』国分寺市文化財調査報告第19集 |

国分寺市遺跡調査会組織

(平成18年3月現在)

－役員及び監事－

会 長	坂 誥 秀 一	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	藤 間 恭 助	元国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	星 野 信 夫	国分寺市長
理 事	大 平 恵 吾	国分寺市教育委員会委員長
理 事	松 井 敏 夫	国分寺市教育委員会教育長
理 事	星 野 亮 雅	元国分寺市社会教育委員
理 事	古 関 豊	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	関 口 雄基臣	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	北 原 進	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	坂 本 克 治	国分寺市文化財保護審議会委員
理 事	関 互	東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課長
専務理事	小 林 文 治	国分寺市教育委員会教育部長
監 事	榎 戸 潔	元国分寺市社会教育委員
監 事	岡 崎 完 樹	東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課埋蔵文化財係長

－武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会－

委 員 長	坂 誥 秀 一	(考古学) 立正大学文学部教授
委 員	藤 井 恵 介	(建築史) 東京大学大学院工学系研究科助教授
委 員	佐 藤 信	(古代史) 東京大学大学院人文社会系研究科教授

－事 務 局－

事務局長	本 多 孝 一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	太 田 和 子	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長
事務局員	松 崎 亜希子	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
事務局員	齋 藤 美由紀	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
事務局員	中 舎 まり子	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課嘱託係員
事務局員	稲 井 亮	国分寺市遺跡調査会

－調 査 団－

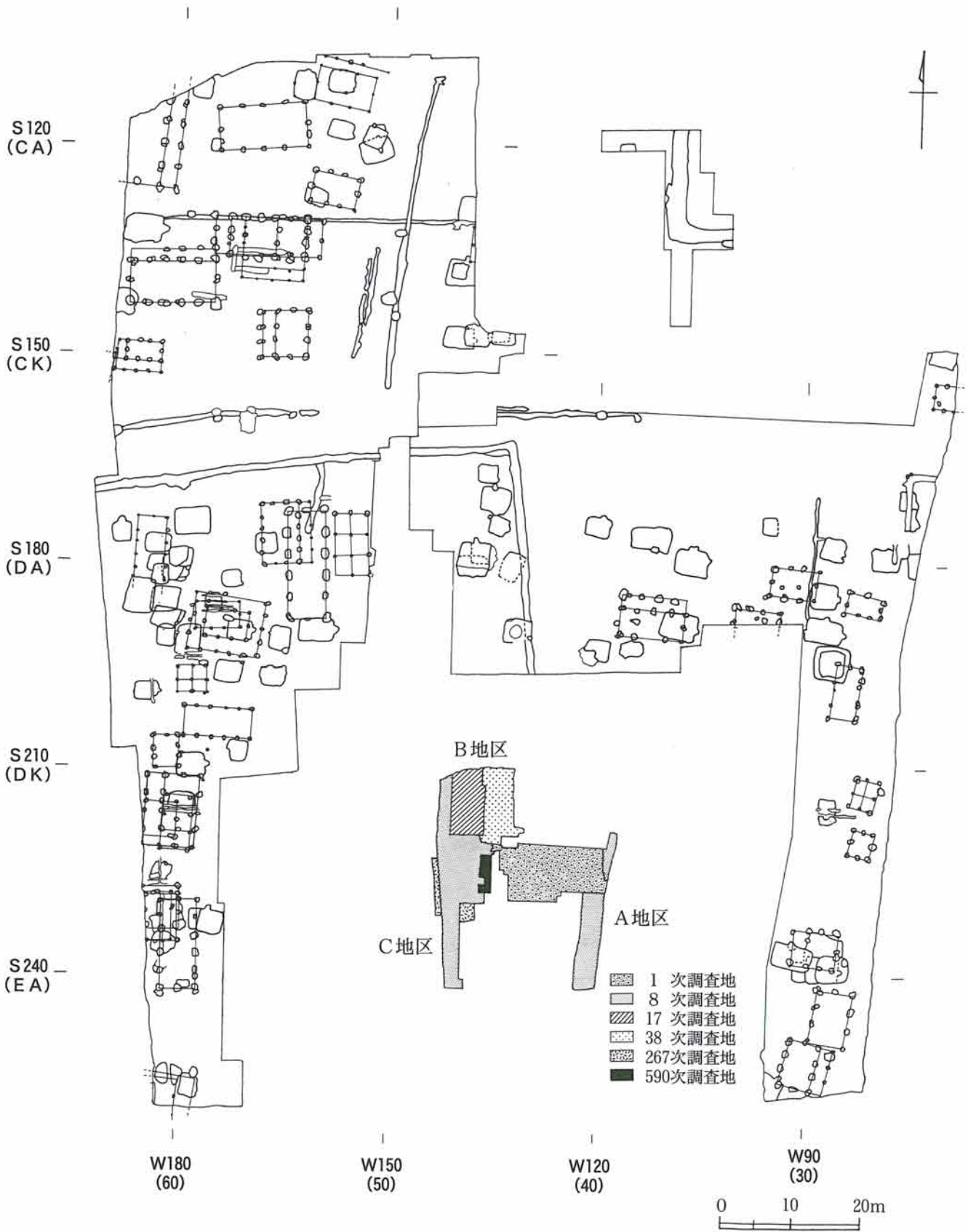
調査団長	坂 誥 秀 一	立正大学文学部教授
主任調査員	福 田 信 夫	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	上 敷 領 久	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課普及担当係長
調 査 員	上 村 昌 男	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係員
調 査 員	中 道 誠	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課嘱託係員
調 査 員	板 倉 歆 之	国分寺市遺跡調査会

報告書抄録

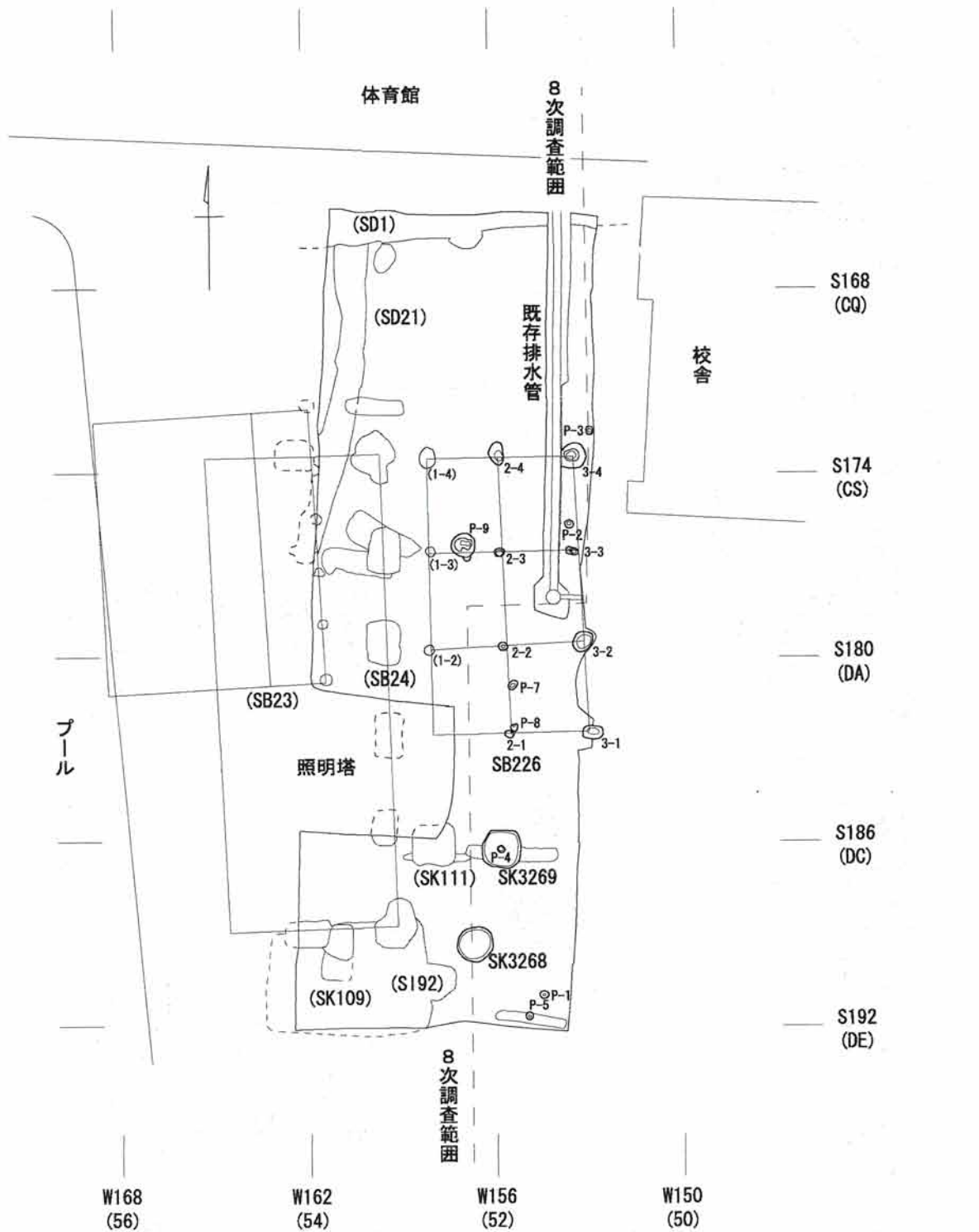
ふりがな	むさしこくぶんじあとはくつちようさがいほう 31							
書名	武蔵国分寺跡発掘調査概報 31							
副書名	市立第四中学校建設に伴う第6次調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	国分寺市遺跡調査団（団長 坂詰秀一）上敷領 久・上村昌男							
編集機関	国分寺市遺跡調査会							
所在地	〒185-8501 東京都国分寺市戸倉1丁目6-1 国分寺市教育委員会内 ☎042-325-0111							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むさしこくぶんじあ と 武蔵国分寺跡	とうきょうとこくぶんじし 東京都国分寺市 にしもとまち 西元町1丁目	13-214	19	35度 41分 09秒 ～ 35度 41分 30秒	139度 28分 12秒 ～ 139度 28分 47秒	2005. 4. 22 ～ 2005. 6. 14	215.2	校舎増築工 事に伴う埋 蔵文化財発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
武蔵国分寺跡	集落跡	奈良・ 平安時代 縄文時代	奈良・平安時代 掘立柱建物 1棟 土坑 2基 小穴 8基 縄文時代 小穴 61基		土師器・須恵器・土師質 土器・灰釉陶器・瓦・鉄 滓 縄文土器・楔形石器			

圖 面

図面1 市立第四中学校々地遺構配置図 (1/800)



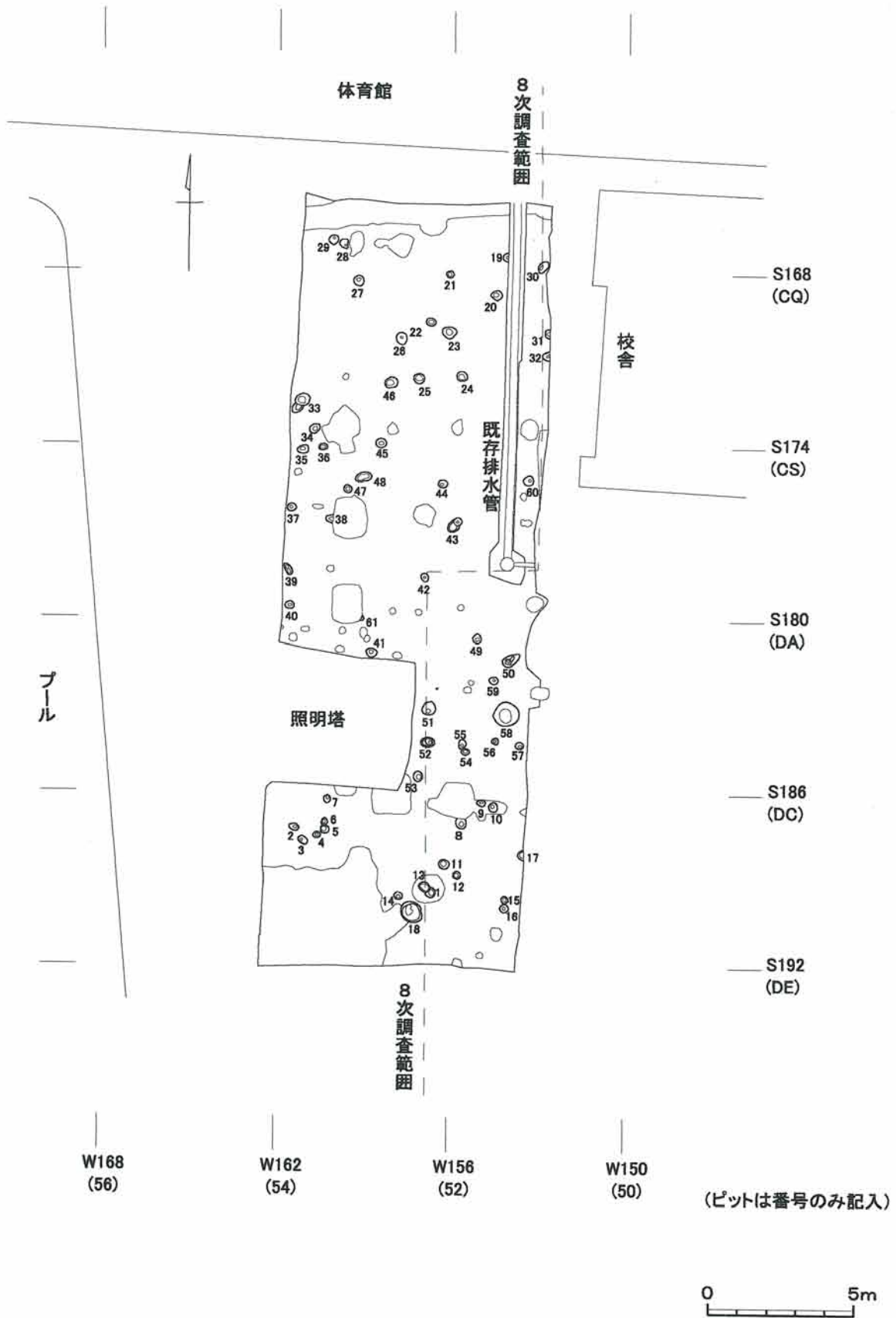
図面2 第590次調査 歴史時代遺構配置図 (1/200)



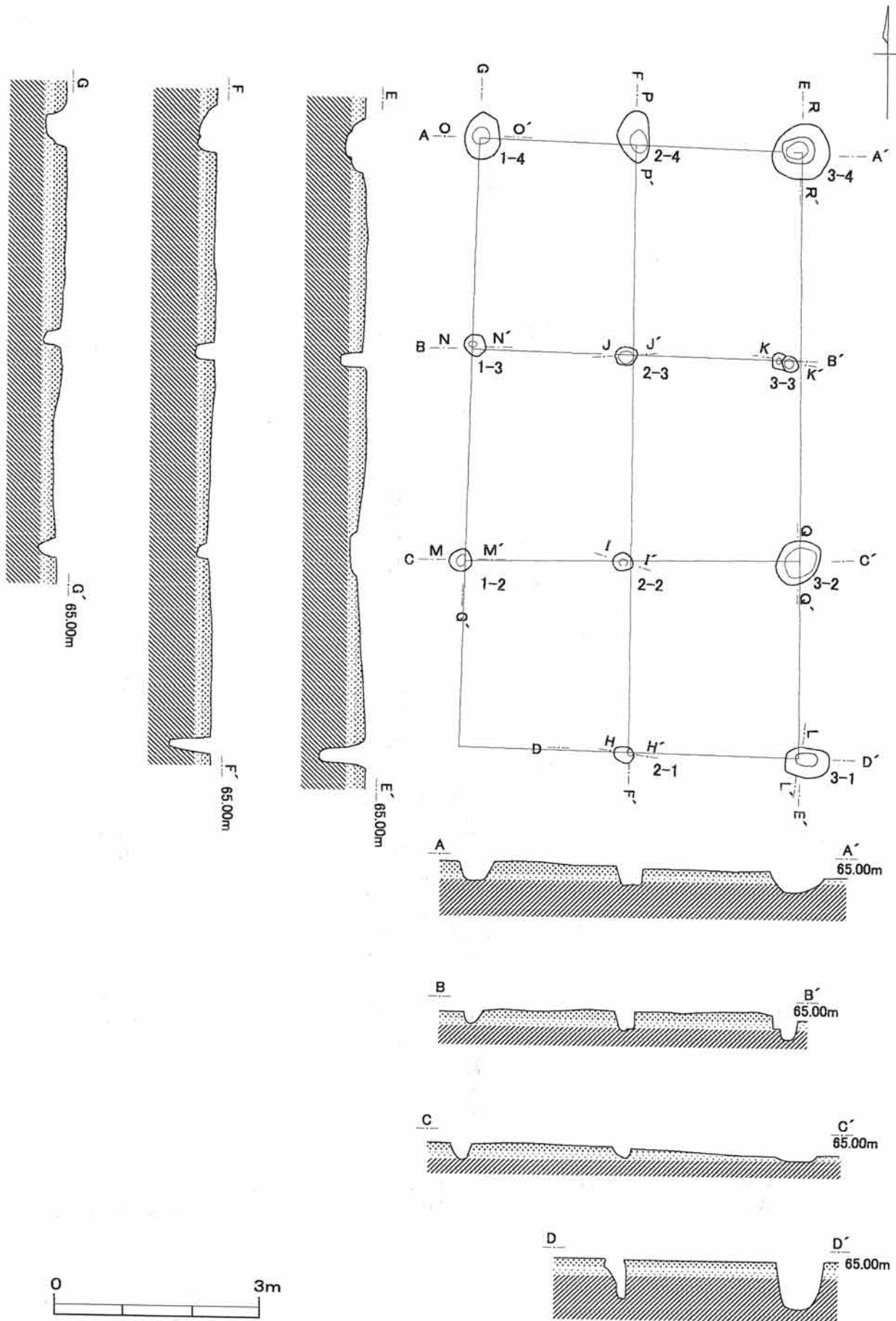
()内は8次調査遺構



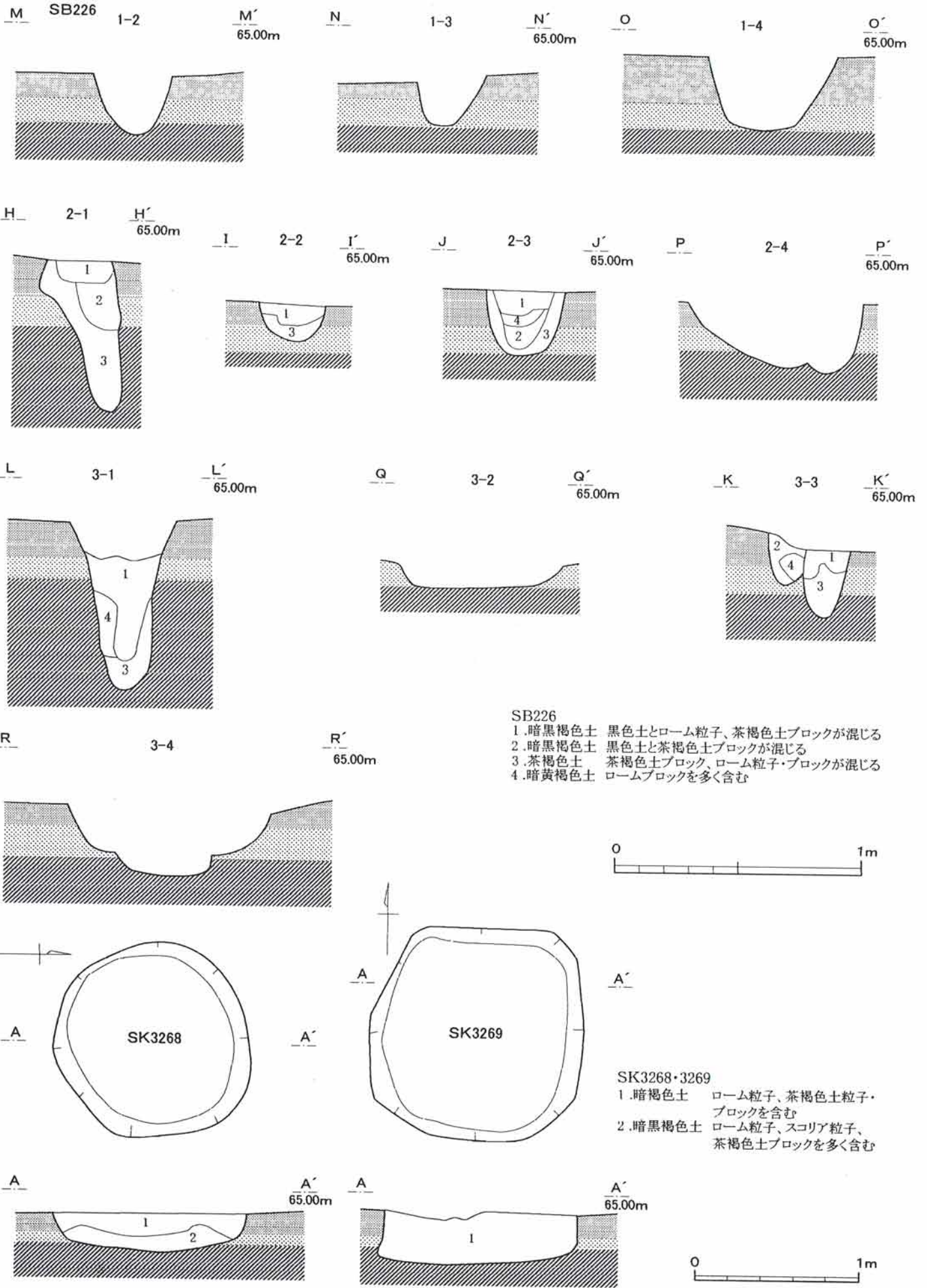
図面3 第590次調査 縄文時代遺構配置図 (1/200)



図面4 第590次調査 S B 226掘立柱建物実測図



図面5 第590次調査 SB226掘立柱建物・SK3268・3269土坑実測図



図面6 第590次調査 SK3268土坑・PJ-19小穴・遺構外出土遺物

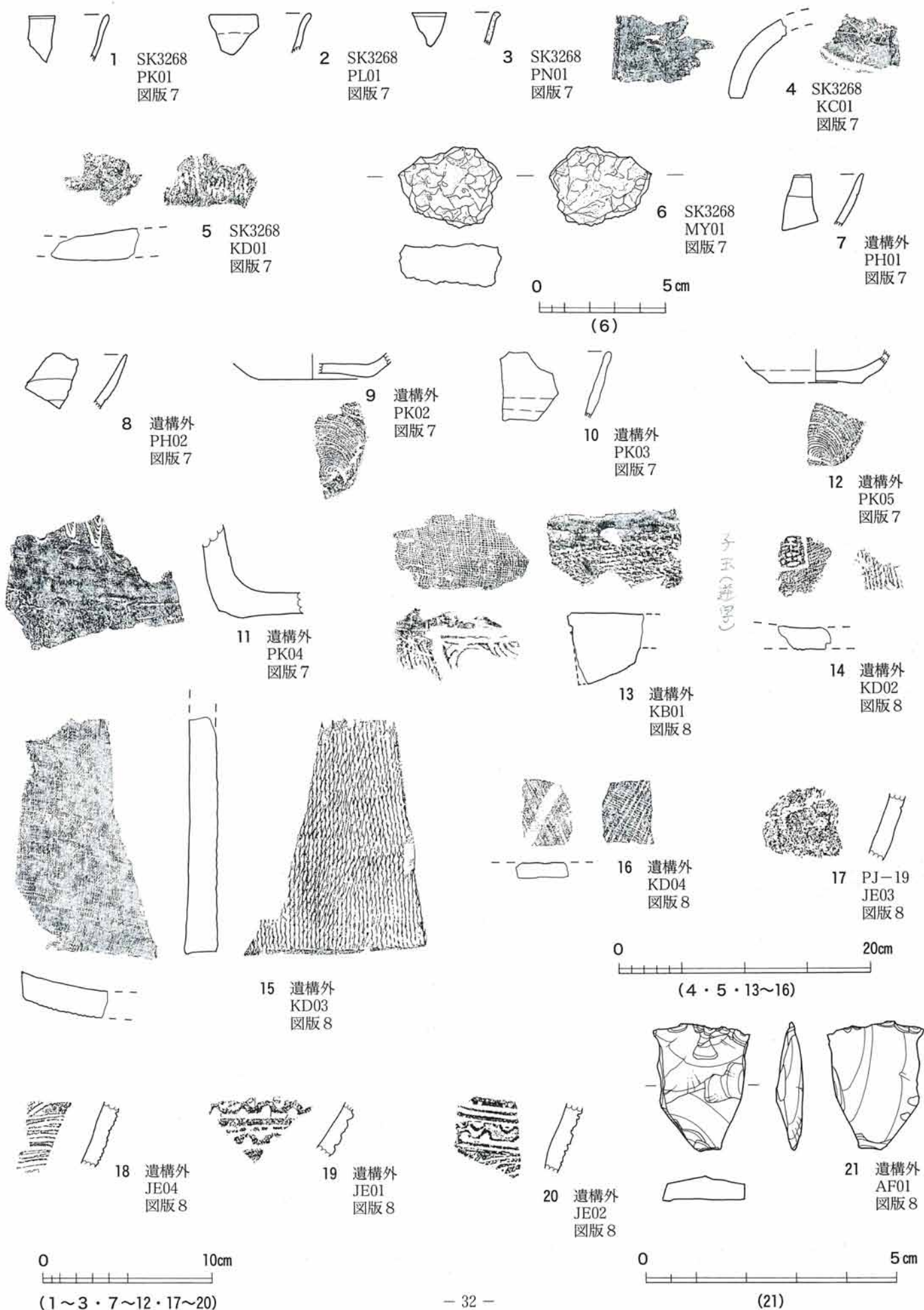
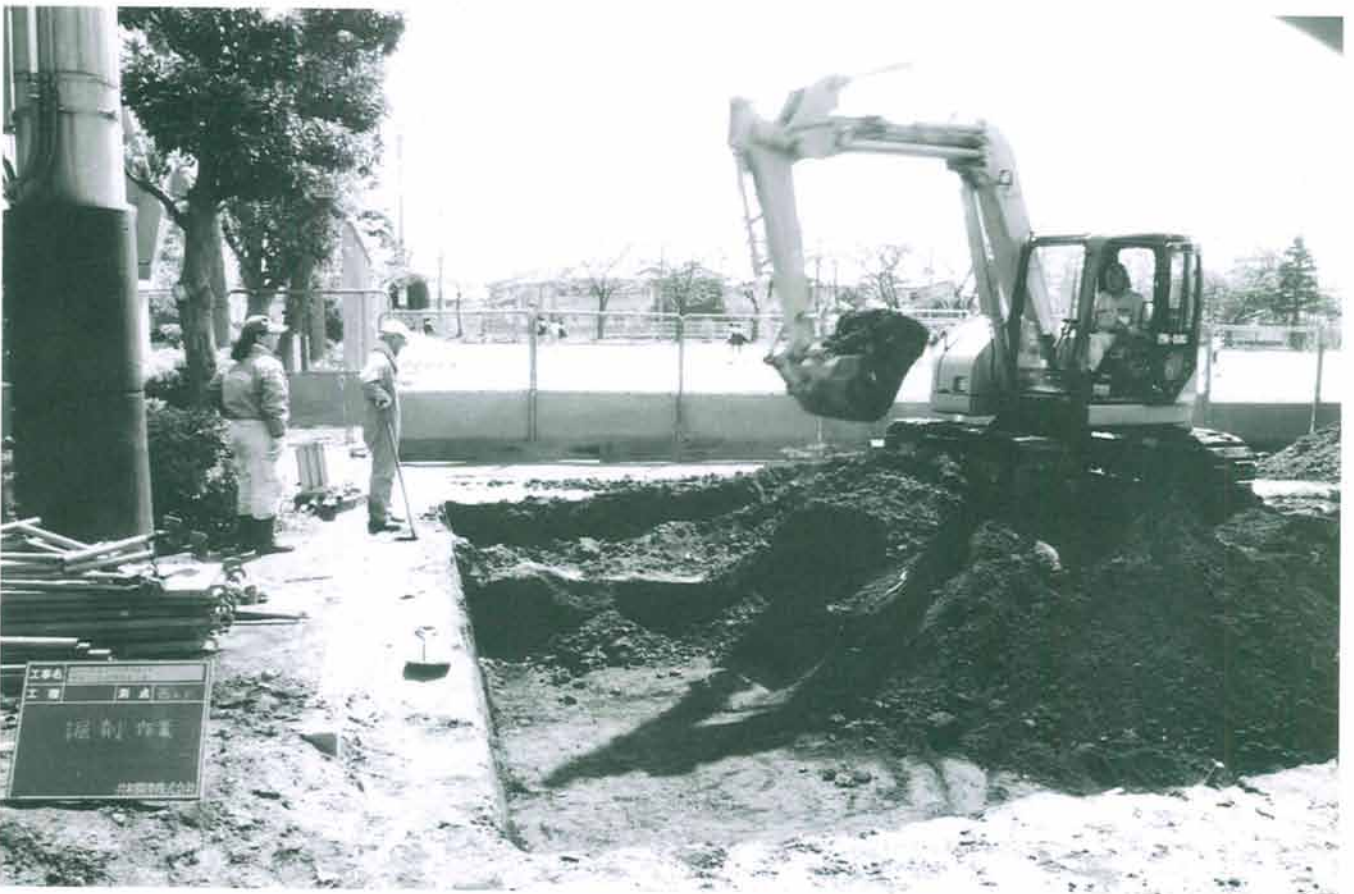


圖 版



1. 調査区 発掘着手時状況（南から）



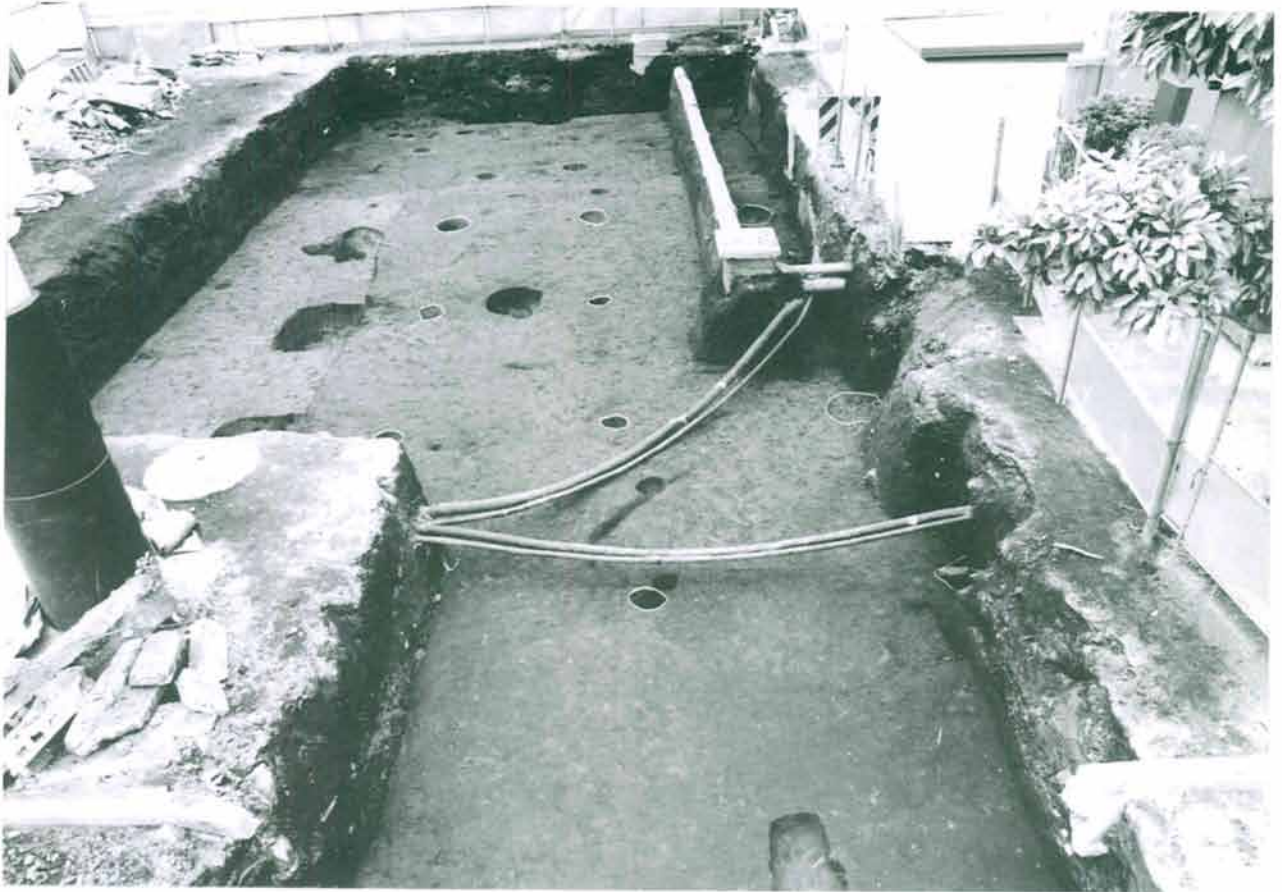
2. 調査区 掘削作業風景（西から）



1. 表土掘削作業風景（西から）



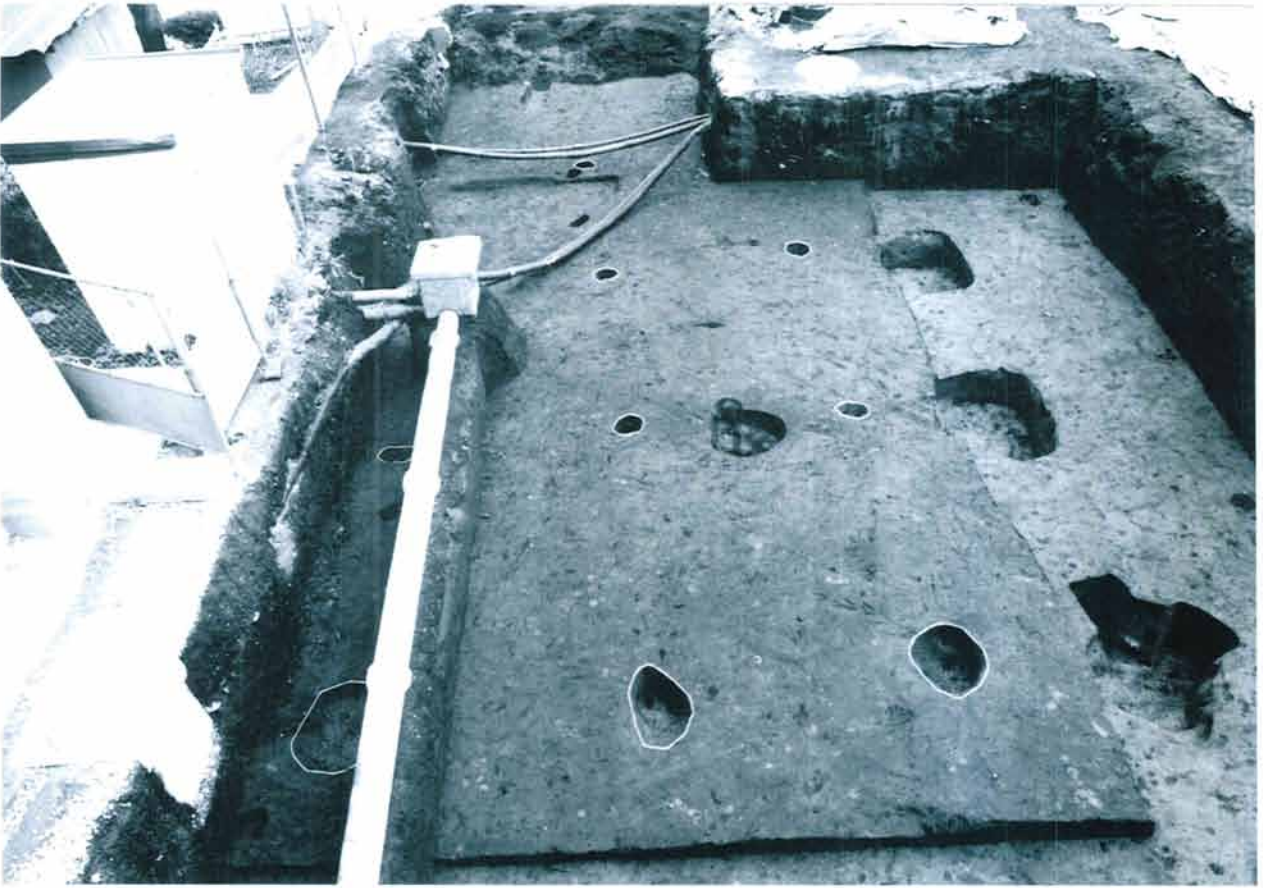
2. 南区 発掘作業風景（北西から）



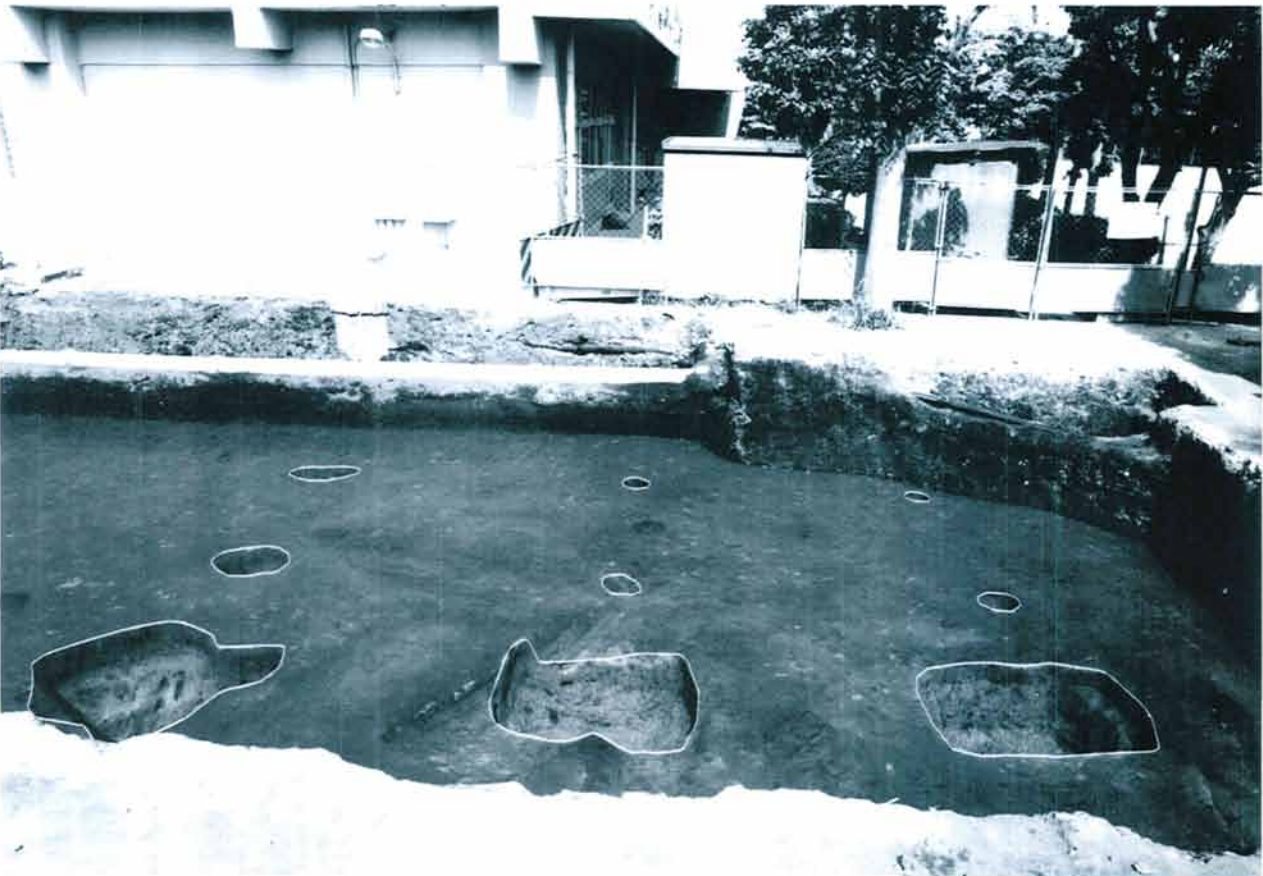
1. 北区 歴史時代検出遺構全景（南から）



2. 南区 歴史時代検出遺構全景（西から）



1. S B 226掘立柱建物全景（北から）



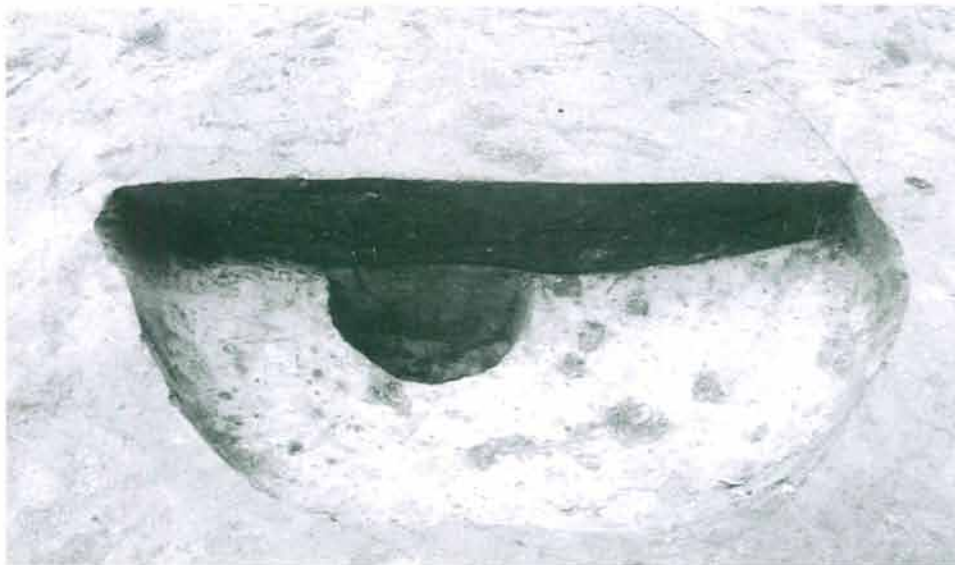
2. S B 226掘立柱建物全景（西から）



1. S K 3268・3269土坑全景 (西から)



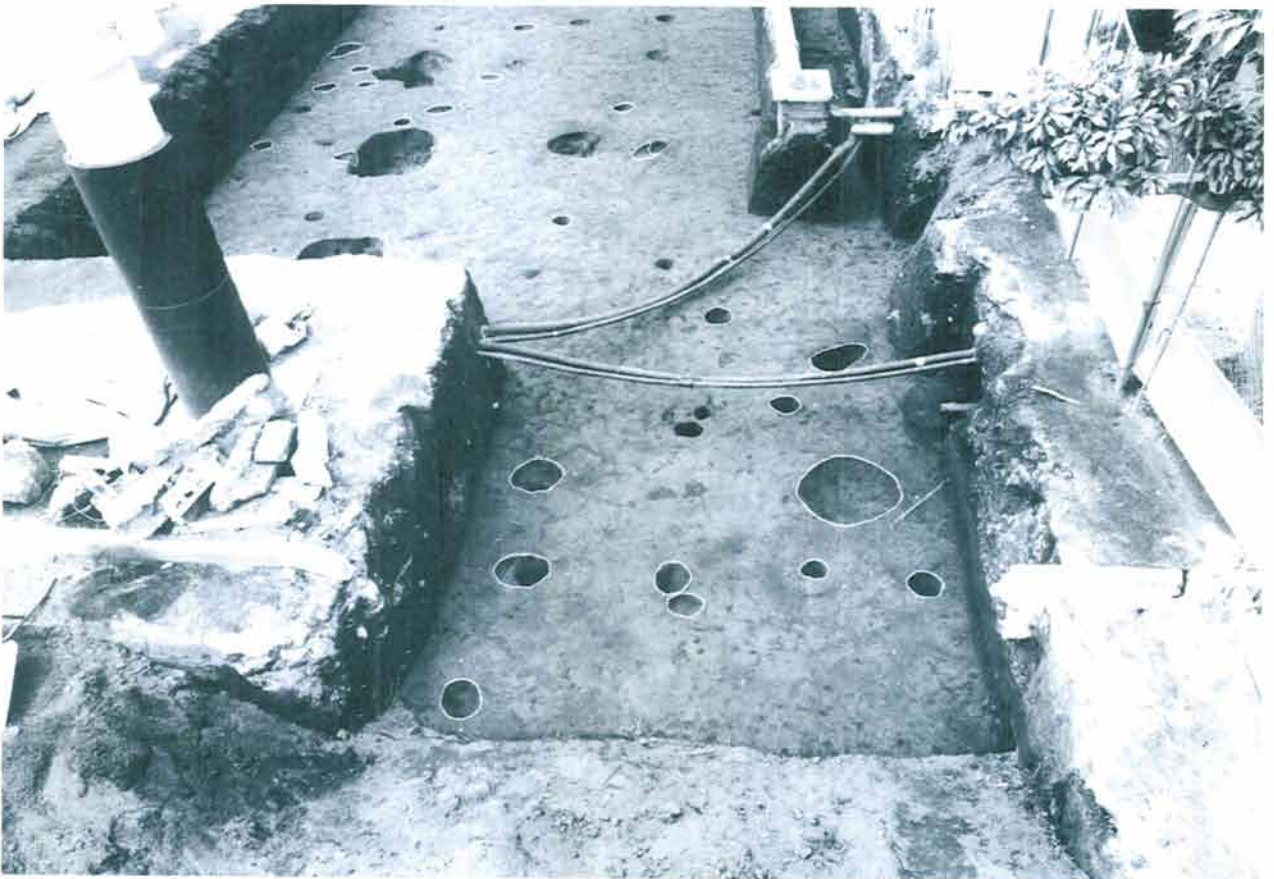
2. S K 3268土坑・P J-1小穴全景 (東から)



3. S K 3268土坑・P J-1小穴土層断面 (東から)



1. 北区 縄文時代検出遺構全景（北から）



2. 北区拡張部 縄文時代検出遺構全景（南から）



図面6-1
SK3268
PK01



図面6-2
SK3268
PL01



図面6-3
SK3268
PN01



図面6-4
SK3268
KC01



図面6-5
SK3268
KD01



図面6-6
SK3268
MY01



図面6-7
遺構外
PH01



図面6-8
遺構外
PH02



図面6-10
遺構外
PK03



図面6-9
遺構外
PK02



図面6-11
遺構外
PK04



図面6-12
遺構外
PK05



図面6-13
遺構外
KB01



図面6-14
遺構外
KD02



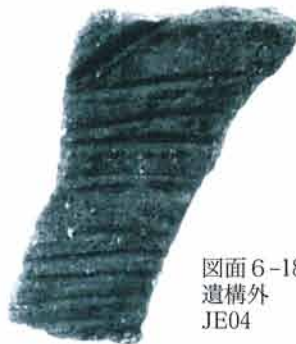
図面6-16
遺構外
KD04



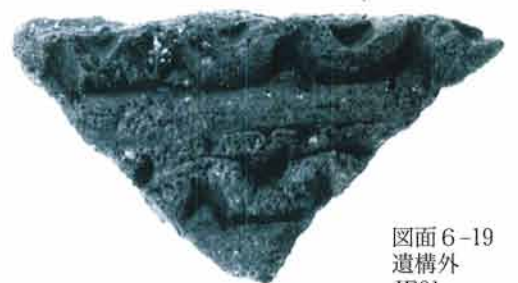
図面6-15
遺構外
KD03



図面6-17
PJ-19
JE03



図面6-18
遺構外
JE04



図面6-19
遺構外
JE01



図面6-20
遺構外
JE02



図面6-21
遺構外
AF01

武蔵国分寺跡発掘調査概報 31

— 市立第四中学校建設に伴う第6次調査 —

発行日	平成18年3月31日
編著者	国分寺市遺跡調査団 © (団長 坂詰 秀一)
発行所	国分寺市遺跡調査会 〒185-8501 国分寺市戸倉1-6-1 TEL 042-325-0111 (代表) 東京都国分寺市教育委員会内
印刷所	コロニー東村山印刷所

令和4年(2022)3月9日 デジタル版作成